



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1986
発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

みよ、御聖体を

御父がつかわされた御方を。

1 「聖なる教会よ、神をほめ称えよ。(詩篇147・12参照)
鳴りひびくこの勧告は、詩篇の作者がエルサレムに向かって話しかけた招きの言葉に、遙かな山彦のように答える。
「エルサレムよ、主をことほげ、シオンよ、あなたの神をほめよ。主は、あなたの扉のかんぬきを強め、その中の子らを祝福された。(詩篇147・12、13)
エルサレムに芽生え、成長した教会は、心の深奥で、生ける神をほめ称えよと、招きをうけている。いま、教会は、この呼び声に、特別な方法で答えたい。三位一体の主日後の木曜日、御聖体の祝日に、キリストの至聖なる御体と御血の祝日に。
2 教会は生まれた、旧約のエルサレムから、御体を通して結ばれる、一つの体となって。「パンは一つで

あるから、私たちは多数であっても一体である、みな一つのパンにあずかるからである。(コリント①10・17)
「私たちが裂くパンは、キリストのおからだにあずかることではないか。(コリント①10・16)
「私たちが祝する祝聖の杯は、キリストの御血にあずかることではないか。(コリント①10・16)
このパンとこのカリスとを、イエズス・キリストの御体と御血にあずかることによって、今日、私たちは、特別な方法で、ほめたたえ、あがめたい、すなわち、荘厳に、公に。
今、この至聖なる犠牲を祝い、その聖体行列は、ローマの幾つかの徑を通してゆく、ラテラノ大聖堂から、エスキリニオの神の御母の大聖堂へと。目的はただ一つ、このパンとカリス、教会がイエズス・キリストの御体と御血にあずかることになる、

このパンとカリスとを、賛美すること。「エルサレムよ、あなたの神をほめよ。」
3 イエズス・キリストはおおせられる。
「私の肉を食べ、私の血を飲む者は、私に宿り、私もまたその者の中に宿る。生きてまします御父が私を遣わし、その御父によって私が生きていくように、私を食べる者も、私によって生きる。(ヨハネ6・56、57)
これこそ教会の生命。教会の生命は、御聖体の秘密をのぞかせてくれる。それを示すのは、聖櫃の側で昼夜燃えつつける灯。この生命はまた、人間の靈魂の秘密を、人間の心の奥にある聖櫃を、開いてくれる。
教会は、キリストが御体と御血の中に制定なさったこの秘義を、この上なく高貴な崇敬でとりかこみ、絶えることなく祝いつつける。人間の靈魂の内なる生命であるこの秘義を。
教会は、この秘跡にふさわしい聖なる慎重さをもって、全力をあげて聖体を祝う。
本日は、大いなるこの秘義について、教会が、全世界に向かって語りかけた日。教会の神の栄光を、御体と御血、すなわち、人間の靈魂の

ための食べものと飲みものとなられたこのすばらしい神を、幾つもの大通りで、幾つもの広場で、大声で歌いつつ宣言したい日。
「……私の与えるパンは、世の命のためにわたされる私の肉である。」(ヨハネ6・51)
それゆえ、「世」はそのことを知らねばならない。この厳かな日に、「世」は、御聖体のメッセージを、キリストの御体と御血のメッセージを、受けとらなければならない。
「私たちが多数であっても、一つの体になしてくるこのパン」を、荘厳な行列で囲みたい。
私たちは、生き、宣言し、歌い、告白したい。
みよ、御聖体を——御父が遣わされた御方を。
みよ、キリストを——御父によって生きる御方を。
みよ、私たちを、キリストにおいて。



私たちが、キリストの御体と御血を食した。
私たちは、キリストによって生きる、御聖体のキリストによって。
永遠の神の御子、キリストのために。「私の肉を食べ私の血を飲む者は、永遠の生命を有する。その御方、キリストは、終わりの日にその人々を復活させる。(ヨハネ6・54参照)
この過ぎ去りゆく世に向かって、「永遠の都」と呼ばれながら、過ぎ去りゆくこの都に向かって、神において、キリストが仲介となってお与えになる永遠の生命を、私たちは告げ知らせたい。
永遠の生命、その始まりと福音のしるしはキリストの復活。
永遠の生命、それを私たちは、御聖体として受ける、永遠の生命の秘跡である御聖体として。
エルサレムよ、聖なる教会よ、神をたたえよ。(八五・六、二十一)

私たちが、キリストの御体と御血を食した。
私たちは、キリストによって生きる、御聖体のキリストによって。
永遠の神の御子、キリストのために。「私の肉を食べ私の血を飲む者は、永遠の生命を有する。その御方、キリストは、終わりの日にその人々を復活させる。(ヨハネ6・54参照)
この過ぎ去りゆく世に向かって、「永遠の都」と呼ばれながら、過ぎ去りゆくこの都に向かって、神において、キリストが仲介となってお与えになる永遠の生命を、私たちは告げ知らせたい。
永遠の生命、その始まりと福音のしるしはキリストの復活。
永遠の生命、それを私たちは、御聖体として受ける、永遠の生命の秘跡である御聖体として。
エルサレムよ、聖なる教会よ、神をたたえよ。(八五・六、二十一)

祈りの生活は

聖霊のうちに、キリストを通して

御父に向かう。

1 教会は、唯一の神にして同時に
 えも言われぬ聖三位のペルソナ、聖父
 と聖子と聖霊にて在す神を信じてと
 宣言します。教会はこの真理によっ
 て生きており、これは、信仰の最も古
 い信条の中に含まれていますが、使
 徒聖ペトロと聖パウロの殉教一九〇
 〇年(196)を機に、パウロ六世が現
 代に呼び起こされた事柄です。それ
 は「神の民のクレド」として、教皇
 の手で示され、世界中に知られてい
 る信条の中にあります。

唯一の神は「みずからをわれわれ
 に知らせることを望み、『近づけない
 光の中に住んで』(ティモテオ①6・
 16) いて、自分自身ですべての名に
 まさるものであり、あらゆる事物と
 創造されたあらゆる知性を越えるも
 のである(…)。神のみがみずから
 を父と子と聖霊として啓示すること
 により、この神的現実についての正
 しく十分な知識をわれわれに与える
 ことがおできになり、われわれはこ
 の神の永遠の生命にあずかるよう、
 恩寵によって招かれていた。この地
 上では信仰の暗さのうちに、死後に
 は永遠の光のうちに。(熊谷賢二訳)

2 人知の働きをはるかに越えた御
 方である神は、御自分を唯一の創造
 主、全能の父として示すばかりでな
 く、聖父と聖子と聖霊としての御自

イエズス・キリス
 トは、かねてか
 ら神について教え
 てこられたこと、つ
 まり聖父と聖子と
 聖霊のことをすべ
 て、この最後のお
 言葉に要約なさっ
 ています。主はイスラエルの伝統に
 従って、最初から、唯一の神に関する
 真理を告げ知らせておいでになり
 ました。「すべての掟の中でそれが
 第一のものですか」と尋ねられたの
 に対して、「第一の掟はこれである、
 『イスラエルよ聞け。われわれの主
 なる神は唯一の主である』(マルコ
 2・19)とお答えになっていきます。
 またイエズスは、(御自分の御父)と
 しての神にいつも話しかけ、「私と父
 とは一つである(ヨハネ10・30)と
 断言なさり、同じやり方で「父から
 出る真理の霊」のことも啓示されま
 した。そしてその方のことを「私が
 父からあなたたちに送る(ヨハネ15・
 26) 御方と云って、私たちに保証な
 さったのです。」

3 神御自身の本質的生命的秘義、
 最も深遠なこの秘義は、イエズス・
 キリストによって啓示されてしまし
 ました。「御父のふところにまします神
 がこれを示された。(ヨハネ1・18)
 聖マテオ福音書によると、キリスト
 が、復活ののち地上での使命を終え
 るに当たり使徒たちにお与えになっ
 た最後の言葉はこれでした。「行け、
 諸国の民に教え、聖父と聖子と聖霊
 の名によって洗礼を授けよ。(マテオ
 28・19) このお言葉によって教会の
 宣教は始まり、教会の本質にかかわ
 る具体的な仕事が指示されたのです。
 教会の最初の仕事とは、教えること
 と洗礼を授けること。ちなみに洗礼
 を授けるとは「水に浸す」という意
 味ですから、洗礼は水で授けます。
 この教理と洗礼によって、すべての
 人が神の三位一体の生命に与るため
 でした。

4 (聖父と聖子と聖霊の名によっ
 て)という洗礼の際の言葉は、イエ
 ズスが地上での使命を終えられた時
 使徒たちに託されたものですが、こ
 れを教会の秘跡的生命的基礎におく
 ことにより聖三位一体に関する真理
 を堅固にして来たため、この言葉は
 特別な意味をもちました。すべての
 キリスト者の信仰生活は、生ける神
 の秘義に浸るときに始まる洗礼を源
 としていきます。それは、使徒たち、
 特に聖パウロの数々の手紙が証言し
 ているとおりです。手紙の中に含ま

れている三位一体形式の中で、一番
 よく知られ、また典礼にもしばしば
 用いられる一節は、コリント人への
 第二の手紙の次の箇所です。「主イ
 エズス・キリストの恩寵、神(御父)
 の愛、聖霊の交わりが一同と共にあ
 るように。(コリント②13・13) その
 他、コリント人への第一の手紙やエ
 フェソ人への手紙、あるいはまた、
 聖ペトロの第一の手紙の第一章の冒
 頭(ペトロ①1・1-2)にもみられ
 ます。

間接的に、教会の祈りの生活は、
 聖霊のうちに、キリストを通して、
 御父に向かう、という風にならな
 くと、そして三位一体に向かう、
 というかたちで発展してきました。

5 こうして三位一体の神への信仰
 は、そもその始めから、教会とキ
 リスト信者の生活の承伝の中に入っ
 ていたのです。従って、典礼全体は本
 質的に三位一体を信じてきましたし、
 現在も信じています。それは、神の
 御計画を表現するものであるからで
 す。贖いを信じること、つまり、キ
 リストの救いの御業を信じることは、
 聖三位一体のこの崇高な秘義を理解
 するのに寄与してきました。それは、
 永遠の三位一体の深奥において、「御
 父から」発出する御子と聖霊の派遣
 を明らかにするものであって、贖い
 と聖化の中に臨在する「三位一体の
 経綸」を啓示することによって明ら
 かになるものです。聖三位一体は、
 まずはじめに救済論を通して、つま
 り、「救世の計画」を知ることによっ
 て、告げ知らされます。その救いの
 計画を、キリストが告げ知らせ、救
 いの使命を履行なさる。さらにこ

れを知ることから、内在する三位一
 体、そして神の内的生命的秘義につ
 いての知識へと向かう道が始まるの
 です。

6 このような意味で、新約聖書に
 は三位一体の啓示が満ちみちている
 と言えます。イエズス・キリストの
 中に御自身を啓示なさることによっ
 て、神は、一方で(私たちに)とって
 神とはどんな方であるか)を啓示し、
 他方(御自身の中、すなわち神の内
 的生命の中では、神とはどのような
 御方であるのか)を啓示なさいます。
 「神は愛である。(ヨハネ4・16)こ
 の真理はヨハネの第一の手紙に述べ
 られていますが、ここではないわは、
 鍵となる真理です。この真理によっ
 て、私たちに)とっての神とはどのよ
 うな御方であるかが啓示されるとす
 れば(人間の理性がそれを理解でき
 る限り、そしてまた、人間の言語が
 それを表現できる限りにおいて)神
 御自身の中)とって神とはどのよう
 な御方であるかもまた、啓示されて
 いることとなります。神は御一体で
 ある、つまり、御父と御子と聖霊の
 交わりであるのです。

7 旧約聖書は、この真理をはっき
 りとは示していませんが、主の民と
 の契約の中で神が父であることを示
 すことによつて、また、上知と言葉と
 霊と共にこの世での主の活動を明ら
 かにすることによって、真理に至る
 べき道を用意しています。(知恵の書
 7・22と30、格言の書8・22と30、
 詩篇32⑨・4と6、詩篇147・15、イ
 ザヤ55・11、知恵の書12・1、イザ
 ヤ11・2、シラの書48・12参照) 旧
 約聖書は、真先にイスラエルで、そ

新約における三位一体

説教・講話・書簡等の抄訳

れからその外で、唯一の神に関する真理、一神教の要、を確立させました。ですからある意味で、聖三位一体の啓示を完全なものとしたのは新約聖書であること、また、三位一体の真理は、そもその始めから、洗礼と典礼によって、キリスト教共同体の生きていく信仰の根本にあった、と結論しなければなりません。使徒たちの手紙にも、また福音宣教の証言にもみだせる信仰の諸規定は、教会の教理教育と祈りに足並を揃えてきました。

8 初期の頃、異端から身を守るために三位一体の教義が公式化されたのは確かですが、これは別問題です。三位一体の神についての真理は、信仰の最も深遠な秘義であり、最も理解し難い秘義でもあります。従って、誤った解釈をする可能性がありました。とりわけキリスト教がギリシャ文化や哲学と接触するようになった

「イエズスの十字架のかたわらには、その母(マリア)が立っていた。イエズスはその母と愛する弟子がそばに立っているのを見られ、母に『婦人よ、これがあなたの子だ』と言われ、また弟子には『これがあなたの母だ』と言われた。その時からその弟子は、マリアを自分の家に引き取った。』(ヨハネ19・25〜27)」

正午の「お告げの祈り」を唱えるにあたり、心の目で、イエズス・キ

時に。その一つの例が、三位一体の秘義を being(在るもの)という用語で正確に表現する場合、すなわち、私たちに啓示された神が唯一にして三位一体であると明確に定義した概念を、その時代の哲学用語を使って正確に表現するような場合です。

こういふことが起こったのは、ニケア(325年)とコンスタンチノープル(381年)での公会議の時でした。これらの公会議での教導職の成果がニケア・コンスタンチノープル信経であるわけですが、その頃から教会は、聖父と聖子と聖霊との三位一体の神を信じてと表明しています。これらの公会議の業績を思いおこすと、特に教会の教父たちの中に、幾人かの目立って傑出した神学者たちがいることに言及しないわけにはゆきません。ニケア以前の時代ではテルトゥリアヌス、チプリアヌス、オリゲネス、イレネウス、ニケア時代にはア

タナシウスとシリアのエフレム、また、コンスタンチノープル公会議のすぐ前の時代には大聖バジリオ、ナジアンソスのグレゴリオおよびニッサのアプロジオ、アウグスティヌスそして大聖レオが思い出されます。

9 五世紀からはいわゆるアタナシウス信経がありますが、これは Oikoumene(キリスト教世界)だれでもという言葉で始まる、ニケア・コンスタンチノープル信経の解説です。パウロ六世による(神の民のクレド)は、初代教会の信仰を確認し、次のように宣言しています。「同一の神の實在である三つのペルソナを永遠に構成する相互のきずなは、われわれが人間の尺度で測りうるすべてのものを無限に越える、聖なる三位の神の聖なるもつとも奥深い生命である」と。まことに、えも言われぬ唯一にして三位の神であります。

神の慈しみをうける青年諸君

マリアを受けいれよう

リストの過ぎ越しの秘義の中あの瞬間を思い浮かべてみましょう。

十字架にかけられた御方は弟子を御母に託されます。以前、「じっと見つめ」(マルコ10・21参照)慈しまれたあの青年のときのように、イエズスが愛を示された弟子でありました。十字架のもとに立つ福音史家聖ヨハネが、イエズスの遺言を書き記したというわけです。

若いみなさん方もキリストの弟子

タナシウスとシリアのエフレム、また、コンスタンチノープル公会議のすぐ前の時代には大聖バジリオ、ナジアンソスのグレゴリオおよびニッサのアプロジオ、アウグスティヌスそして大聖レオが思い出されます。

9 五世紀からはいわゆるアタナシウス信経がありますが、これは Oikoumene(キリスト教世界)だれでもという言葉で始まる、ニケア・コンスタンチノープル信経の解説です。パウロ六世による(神の民のクレド)は、初代教会の信仰を確認し、次のように宣言しています。「同一の神の實在である三つのペルソナを永遠に構成する相互のきずなは、われわれが人間の尺度で測りうるすべてのものを無限に越える、聖なる三位の神の聖なるもつとも奥深い生命である」と。まことに、えも言われぬ唯一にして三位の神であります。

ですから、ヨハネと一緒に、みなさんの師である方の御母に託されています。みなさんは、世の贖いが成就するときに、聖母の保護にゆだねられたのです。

使徒聖ヨハネが「マリアを自分の家に引き取った」ように、みなさんも生活のなかにマリアを受け入れなければなりません。歓迎迎えるのです。マリアが母となってくださることを歓迎せねばなりません。心と良心を聖母マリアに向けて開いてください。みなさんが歩む道々でキリストを見出しキリストに従えるよう、聖母の御助けが与えられますように。

(一九八六・三・二十三)

現代において、信仰をもつ(信仰する)とはどういうことでしょうか。文化を毒する不可知的態度、大衆の無関心、さらには、宗教面における浮薄感情などの大波に毒された世界にあって、信仰を全きままに保ち、かつ生き生きさせるとは一体どういうことなのでしょう。

今日、「信仰をもつ」とは、キリストがお教えになつた真理、すなわち、啓示と贖いをふたたび自覚することであり、先に述べたような危険があるというのは事実です。しかし、結局は真理が浮かび出て勝利を得ます。

「世に勝つ勝利はすなわち私たちの信仰である。」(ヨハネ①5・4)

「(地獄の門も)これに打ち勝てないだろう。歴史がそれを証明しています。たえず波の動きにさらされている状態にあって全ては移ろい行くものですから、どの分野においても全てが変化します。しかし「天地の過ぎ行くまで、律法の一点一画もすたれず、ことごとく実現する。」(マテオ5・18)(…)

今日、「信仰をもつ」とは、忍耐することです。忍耐は使徒職のためにつねに必要でありましたが、とくに今日一層要求されているようです。忍耐とは、過ちを犯して黙認することや、静寂主義的寛容、

月のめ道(第八版新訂版)(定価二二〇〇円)
女性「エスクリバー師との会見」より(七五〇円)
子供の性教育 E・A・ホルダン著(七五〇円)

信仰をもつとは?

◆◆司祭・修道者の方々へ◆◆

臆病かつ不活発な態度、誤謬や不明瞭な事柄に降伏する態度のことはありません。忍耐とは、摂理を受け入れること、すなわち個人と民族が成熟を遂げるための時間や種々な道を尊重する摂理をうけ入れることなのです。忍耐するとは、苛立ちや激怒、性急、欲求不満、道徳退廃、倦怠を克服することです。そうして始めて、疲れをものともせぬ献身と、謙遜が表にあらわれぬ態度を保ちつつ、しかもつねに、鋭敏かつ一貫した態度で自らの使命を果たすことができるでしょう。(…)

最後に、今日、「信仰をもつ」とは、霊的な面で熱意を保つことです。(…) 内的(霊的)な熱意という宝をゆたかにもっていないと、真理を人々に伝え、「恩寵」の道具となることもできません。従って、内的生活に力を入れて励め、内的生活を忠実に深めよ、と申し上げねばならないでしょう。とくに、聖体祭儀と聖体に関する信心のわざ、日々の黙想や念禱を忠実に内的生活の糧とすべく努めることです。ご聖体の秘跡を通してのみ、子供の無辜、若者の純粋、結婚生活の貞潔と忠実、司祭、修道者としての奉獻が可能になるのですから。

(一九八六・三・十九)

不変の教え

先生たちへ 霊的な洞察力を 身につけよう

カトリック教師の難しい使命

カトリックの教師である皆さん方は、常に正しい教えを深く学びかつそれを自ら証人となつて、同時代に生きる人々に伝える使命をもっています。今日、キリスト教の本来の姿はしばしば見失われ、神のみ旨にかなった真の人間、国家、文化の進歩の基となるべき不変の原則をそこから引き出すことも不可能な場合が少なくありません。

カトリック教師には、愛情をもって一歩一歩、信仰の真理に対してひらかれた目を持ち、聖霊の力を得て清い心で真実の信仰を受け入れることのできるよう、人々を準備してゆく責任があるのです。

ご存じのとおり人間の理性は、神の存在が第一の絶対不可欠な原則であるという事実を認識する能力を持ち、推理によって人間の存在が神に負っているということも知っています。ところで、キリストは啓示を与え、人間が生まれながらにもっている理性の光をさらに照らし、神のおことばを信じるようにと促してくださいました。それゆえこの「神のおことば」をすすんで受け入れ同意することのできるよう、いつも理性をととのえておかなければなりません。



宗教的な事柄に関して、真理の探究を推し進めて行く必要があるでしょう。これは現代、とりわけ公立学校のカトリック教育者に課せられた、重要な仕事の一つです。実際、公會議の宣言も、「すべての人間が同時に自然法に服従し、かつ、真理、とくに宗教的真理を探究しなければならぬ」といった道徳上の義務によって拘束をうけるといっても、それは理性をもち、自由意志をそなえ、またそれゆえ自分に責任を負うという特権を有した個人の尊厳に矛盾することではない」と述べています。(『信教の自由に関する宣言』2)

皮相的な見方をすると、みなさんの隠れた生活は教会と人々にとつてあまり大きな意義をもっていないように思われるかもしれません。しかし、信仰に照らされた目でながめると、それが、そうでないことがあきらかになるでしょう。

みなさんの主に仕える生活は偉大であると言ふべきです。教会がみなさんに期待するところは大きくあります。同じく、真理と愛、絶対者に渴く人の心は、みなさんの証し人としての生活のなかに多くを見出すことでしょう。

隠れた生活の意味 —— 観想修道者のみなさんへ

みなさんは召しだしによって、こゝろにちの諸問題と霊的価値に対して、個人のレベルのみならず、より広く、社会と教会のレベルで特別な感性をもたなければなりません。この感性

たとえ大勢の人が信仰の真理を受け入れなくとも、辛抱強く慈しみをもちて対話を重ねて行けば、彼らに霊的・宗教的な価値を理解させることができますし、またそうしなければなりません。宗教的価値観とは、信者であれ未信者であれ、人間なら誰しも理性で認めることのできる証拠にもとづいているものですから。

霊的な洞察力

このようにデリケートな難しい使命を果たすには、時間をかけて慎重に準備して行く必要があります。(…)以上の提案のしめくりとして、シエナの聖カタリナがよく口にしていた、聖なる分別に従って行動できるように、神にお願ひしてください。善悪を見分ける霊的洞察力があれば、現代の流行思想のあれやこれを、キリストの不変の根本原則に照らし合わせて評価できるようにになります。こうして「真理をつかみ、誤りの根

聖霊の光に支えられた召しだしによって、みなさんは人の心、つまり、超越と正義、自由、命の充満を切望する人の心を深く知るよう求められています。(…)

元を探つて、反証を加える(『司祭の養成に関する教令』15) ために。学生たちを霊的に円熟させるのよう判断ができるよう導くのは、常に変わらぬカトリック教師最大の目標です。キリストは私たちに知恵の霊を送り、これを示してくださいました。聖パウロがコリント人への第一の手紙の中で強調しているように、「霊的な人」は「すべてを判断し、自身はだれからも是非されることはない」(2・15) のです。

女性教師のみなさんは、よい心がまえさえあれば、真理をひろめ常に善を行なおうという持ち前のすばらしい豊かな精神を発揮して、教会と現代社会にすこぶる大きなかけがえない貢献をすることが出来ます。ぜひそうしてください。もちろんこれらのことは特別な意味で宗教的こととがらに当てはまりませんが、今はとくに、女性の召しだし全般について申し上げたいと思います。(三・九)

はとくに、神のおことばを聞き、霊の光に耳を傾けつつ行なう事実や出来事の評価から生まれでるべきです。みなさん方シスターはとりわけ、聖パウロの言う「霊的な人」(コリント①2) となる必要があります。霊的な人は聖パウロ同様、「イエズス・キリスト、十字架につけられたイエズス・キリストのほかに何も知るまい」(同2・2) と決心しているものです。洗礼を受けた人はみな十字架につけられたイエズス・キリストをまねるべきですが、召しだしを受けたみ

子供は神の贈り物

子供を産むということは、すなわち子供を神から受けることです。生まれ出る子供を神からの贈り物として受け容れることなのです。

ここにこそ、父や母である人たちに託された使命の偉大さを見ることが出来るのではないのでしょうか。自分たちの子供を形づくるということでは天の御父の道具となるわけですから。ところで、自らの使命を果たすにあたり、親たる者がどうしても尊重すべき限界があります。親たる者は、子供たちを自分の所有物と考えてはならないということ。すなわち、子供が天の御父に対してもっている特別の関係を注意を払いつつ、子供たちを教育しなければなりません。(一九八六・三・一九)

みなさんは特に御父に全てをおさげするよう召されています。みなさんの修道規則は、この奉獻を心静かにまた実りある仕方で現実化させる機会を無数に与えてくれるでしょう。聖母マリアと創立者の方々の取り次ぎにより、聖霊が、世界と教会の救いにとって不可欠な仕事を心おしみなく果たすべく皆さんを助けてくださいますように。教会全体がみなさんの協力を援助に期待していることを忘れないでください。私教皇も、みなさんの祈りと犠牲に絶大な期待をかけております。皆さんに心から祝福を送ります。(一九八六・三・一九)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部七十円送料四十円 一年予約八〇〇円送料五〇〇円 二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393